

『源氏物語』係結小考

——第二十八卷「野分」卷——

山口 雄 輔

本稿は、いわゆる「係り結び」の研究であるが、狭義の「ぞ・なん・や・か」連体形の場合と、「こそ
ゝ已然形」の場合に範囲を限り、「は・も」終止形については取り上げていない。又、係助詞の用法として、
断止法（文末に終助詞的に用いる用法）があるが、こちらの方は取り上げている。従って、厳密には、係助詞
「ぞ・なん・や・か・こそ」の係り用法と断止法の研究と言ふべきものであるが、簡潔を期して、表題のように
したものである。

今回「野分」巻を選んだのは、私の主催する『源氏物語ゼミ』という自主ゼミで、たまたま本年度この巻を扱っ
ているからという単純な理由による。『源氏物語』五十四帖全巻をまとめたものを刊行できる日を夢みつつ、そ
の一里塚としてここに発表させていただく。

詞の比率は、次の表1のとおりである。「や」は疑問・

「野分」の全文（和歌も含む）における係助詞「ぞ」
反語の場合に限り、いわゆる間投助詞の「や」は除外
した。百分率の数値は小数点以下第二位を四捨五入し
「なむ」「や」「か」「こそ」の総数は八三例で、各係助

であるので、計の一〇〇パーセントの値に多少の誤差が生じることがある。全文の表から、言語場面により、和歌と散文、散文を更に地の文と話の文、地の文を又更に、会話文と心話文という具合に、次第に詳しい表を作って見て行くことにする。

表1 野分(全文)

百分率	用例数	
28.9%	24	ぞ
13.3%	11	なむ
18.1%	15	や
12.0%	10	か
27.7%	23	こそ
100%	83	計

韻文である和歌は別に扱うことにして、表1から和歌を引いて、次の表2を作る。「なむ」「なん」は区別せず、「なむ」として扱った)

表2 野分(散文)

百分率	用例数	
29.3%	24	ぞ
13.4%	11	なむ
18.3%	15	や
12.2%	10	か
26.8%	22	こそ
100%	82	計

ここで係助詞を出現率順に並びかえ、数字を一切なくして、至極単純な表3を作ってみよう。そうすることによって、どの係助詞がよく使われているかが一目瞭然になるはずである。そして、(A)上位二位と、(B)最上位および最下位に着目した型の名を付しておく。

表3 野分(散文における係助詞出現順位)

係助詞	一位	二位	三位	四位	五位
ぞ					
こそ					
や					
なむ					
か					

(A)ぞーこそ 上位型
(B)ぞーか 遠隔型

表2・3によれば、「野分」の、和歌を除く散文中において、係助詞「ぞ」「なむ」「や」(紛らわしいが間投助詞「や」は除外した)「か」「こそ」の総数は八二例であり、そのうち「ぞ」の使用率二九・三%(二四例)が最も高く、「こそ」が二六・八%(二二例)でそれに次ぎ、この「ぞ」と「こそ」の二種の係助詞だけで既に五〇%を上回っている。このような分布の型を(A)ぞーこそ上位型と呼んでおく。更に、「や」がぐっと引き離された一八・三%(一五例)で中位を保

ち、「なむ」が二三・四％（一一例）、「か」が一二・二％（一〇例）とつづいている。最上位の「ぞ」とはかなり隔たっているという意味で、仮に、(B)ぞーか遠隔型と呼んでおく。

ここで、係助詞の出現する場面を、いわゆる言語場面に分けて、それぞれの場面の出現率を見ることにする。ここで言う言語場面とは、地の文と会話文と心話文（心中思惟）の三場面である。消息又は話の文に含める。

表4 野分（散文 言語場面別）

百分率	計	会話文		心話文		地の文		
29.3 %	24	13.2 %	5	23.5 %	4	55.6 %	15	ぞ
13.4 %	11 (3)	28.9 %	11 (3)	0 %	0	0 %	0	なむ
18.3 %	15	18.4 %	7	23.5 %	4	14.8 %	4	や
12.2 %	10	7.9 %	3	17.6 %	3	14.8 %	4	か
26.8 %	22	31.6 %	12	35.3 %	6	14.8 %	4	こそ
100 %	82 (3)	100 %	38 (3)	100 %	17	100 %	27	計

() 内は消息文の数

表4は、用例数と百分率の数値が交互に並んでいるためにかえって読み取りにくいこともあるので、表2から表3を作ったように、数字ぬきの単純な表5を作る。

表5 野分（言語場面別出現順位）

	一位	二位	三位	四位	五位
地の文	ぞ	こ か や こそ			
心話文	こそ	や ぞ		か	
会話文	こそ	な む	や	ぞ	か

このように言語場面別の表を作って比べて見ると、当然のことながら、各係助詞の出現順位が、言語場面によって大きく変動する。

地の文には客観的に指示する性質を持つと言われる「ぞ」が最上位に進出している。そのうち一例を掲げておく。

○唯はひ渡り給ふ程ぞ、ふと見えたる。地六二⑩
心話文では、指示する力の程度が最も強いと言われ

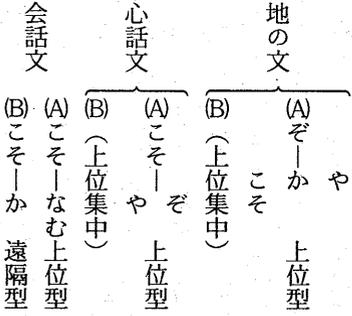
る、強調の「こそ」が最上位に進出している。一例を引く。

○「さこそはあらめ」と思ふに(心五五③) (話主—夕霧中将)

会話文では、「こそ」に次いで、語りかける性質を持つと言われる「なむ」が上位二位を占めている。その「なむ」の例を一つ。

○「まだ、あなたになむ、おはします。」(話六〇⑫) (話主—御乳母)

例によって、上位二位に注目した型の名称を(A)、最上位と最下位に注目した名称を(B)として次に示す。



これによって、表5でも読み取れたことが一層歴然となったわけである。

表5によって、どの言語場面にはどんな出現順位で各係助詞が並ぶかを見たわけだが、今度は逆に、それぞれの係助詞がどの言語場面によく出現するかしないかを見るために、表6を作る。これまでのように縦に比率を見るのではなく、横に比率を見るようにした。

表6 野分(散文 係助詞出現順位)

百分率	計		会話文		心話文		地の文		ぞ	なむ	や	か	こそ	計
	数	%	数	%	数	%	数	%						
100%	24	20.8%	5	16.7%	4	62.5%	15	15						
100%	11	100%	11	0%	0	0%	0	0						
100%	15	46.7%	7	26.7%	4	26.7%	4	4						
100%	10	30.0%	3	30.0%	3	40.0%	4	4						
100%	22	54.5%	12	27.3%	6	18.2%	4	4						
100%	82	46.3%	38	20.7%	17	32.9%	27	27						

()内は消息文の数

表6によって、「ぞ」なら「ぞ」が地の文に多いと

いうのも、百分率の数値で知ることができる。すなわち、「ぞ」は地の文だけで他の言語場面を圧して六一・五%も占めていることがわかる。「なむ」は会話文にしか見られない。「や」は会話文に多いと言っても半分以下の四六・七%でしかない。「か」は地の文にやや多く四〇%である。「こそ」が会話文の半数を上回る五四・五%を占めている。例によって、数字を除いた単純化の作業を行い表7を得る。係助詞別の言語場面の出現順位である。

表7 野分(係助詞別)

		一 位	二 位	三 位
ぞ	地の文	会話文		心話文
なむ	会話文			
や	会話文	地の文		
か	地の文	心話文		
こそ	会話文	心話文		地の文
全体	会話文	地の文	心話文	

表7ですぐ気付くことは、全体で会話文が最上位であるにもかかわらず、最上位のすべてが会話文であるとは限らないということである。語りかける性質の「なむ」で、会話文が一位にくるのは当然にしても、「こそ」の場合も会話文が一位にきている。「ぞ」の一位は地の文である。「こそ」は主観的、「ぞ」は客観的という性質で一応の説明はつきそうである。

二

次に係助詞の文法的用法、つまり、各係助詞に対応する結びがどのようなようになっていくかについて調べた結果を示す。文末にくる係助詞の、終助詞的用法を認める立場に立って、通常の係り用法に対して特に断止法として扱う。係り用法を、結びの活用語の品詞によって、動詞、補助動詞(待遇表現に限定)、形容詞、形容動詞、助動詞、名詞、副詞に分け、更に結びの省略用法と消去用法(いわゆる結びの流れ)の項を設けることにする。

表8 野分(散文 全用法)

百分率	総数	こそ	か	や	なむ	ぞ	係り用法
13.4%	11	5		1	1	4	動詞
9.8%	8	2		1	1	4	補助動詞
2.4%	2	2					形容詞
							形容動詞
43.9%	36(1)	13	7	4	4(1)	8	助動詞
							名詞
							副詞
15.9%	13(2)		1	6	5(2)	1	省略用法
1.2%	1					1	消去用法
13.4%	11		2	3		6	断止法
100%	82(3)	22	10	15	11(3)	24	合計

係り用法のうち、結びに用言をとるものは動詞に三・四%が見られる他は形容詞に二・四%、形容動詞では皆無と、あまり多くない。助動詞を結びとするものは四三・九%で全体の半分近い。結びの省略用法は助動詞に次ぐ高率と言っても一五・四%でしかなく、そのほとんどが「なむ」と「や」である。結びの消去

用法、いわゆる「結びの流れる」用法は一・二%とかなり少なく、「ぞ」に一例が見られるのみである。断止法は二三・四%で、動詞と並ぶ使用率である。補助動詞の九・八%は待遇表現なので、係り結びと敬語の間に相関関係があるかどうかという重要な問題をはらんでいるので後に改めて述べる。

それではこれから、各係助詞の用法の展開を、实例に即して見て行くことにする。「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」の順に、三つの言語場面別の表を作り、係助詞の用法をまず大きく、

I 係り用法

II 断止法

の二つに分け、Iの係り用法を、(一)結びの語が用言の場合、三つの品詞からそれぞれ代表的な用例を掲げるが、皆無の場合もその旨を断って進める。名詞・副詞などの特殊な例は「野分」には見当たらず、従ってこれらの項は成立しない。ただし、他の巻や他作品との比較を考慮して表には空欄を設ける。助動詞は数も多いので、改めて(二)として、助動詞の種類別に例を掲げる。結びの省略用法を(三)、消去用法を(四)とする。(五)と

『源氏物語』係結小考

百分率	合計	会話文		心話文		地の文		ぞ		係り用法
100%	4	25.0%	1	25.0%	1	50%	2	動詞		係り用法
100%	4					100%	4	補助動詞		
								形容詞		
								形容動詞		
100%	8	12.5%	1			87.5%	7	助動詞		
								名詞		
								副詞		
100%	1	100%	1					省略用法		
100%	1					100%	1	消去用法		
100%	6	33.3%	2	50.0%	3	16.7%	1	断止法		
100%	24	20.8%	5	16.7%	4	62.5%	15	合計		

して結びに敬語の補助動詞がくる場合、Ⅱの断止法では、いわゆる終助詞的な用法について述べる。

表9 野分(散文)

百分率	合計	会話文		心話文		地の文		なむ		係り用法
100%	1	100%	1					動詞		係り用法
100%	1	100%	1					補助動詞		
								形容詞		
								形容動詞		
100%	4(1)	100%	4(1)					助動詞		
								名詞		
								副詞		
100%	5(1)	100%	5(2)					省略用法		
								消去用法		
								断止法		
100%	11(3)	100%	11(2)	0%	0	0%	0	合計		

()内は消息文の数

表10 野分(散文)

○ 御乳母ぞ、きこゆる。 [地六〇⑭]

○ 唯はひ渡り給ふ程ぞ、ふと見えたる。 [地六一⑫]

「ぞ」の係り用法を表9で見ると、地の文に集中して、助動詞がほぼ半数を占め、用言では動詞に二例、形容詞・形容動詞は見当たらない。動詞・助動詞から一例ずつ引く。

Ⅰ 係り用法
(一) 結びが用言の場合

百分率	合計	会話文		心話文		地の文		や		係り用法
								動詞	補助動詞	
100%	1	100%	1							
100%	1	100%	1							
100%	4	50%	2			50%	2			
100%	6	16.7%	1	50.0%	3	33.3%	2			
100%	3	66.7%	2	33.3%	1					
100%	15	46.7%	7	26.7%	4	26.7%	4			

表11 野分(散文)

(話主—御乳母)

表10によって「なむ」の係り用法を見る。
 地の文・心話文には一例も見当たらず、会話文において、動詞が一例、助動詞が四例、省略用法が五例出現している。動詞の一例を引く。
 ○「まだ、あなたになむ、おはします。」 語六〇⑫

百分率	合計	会話文		心話文		地の文		か		係り用法
								動詞	補助動詞	
100%	7	28.6%	2	28.6%	2	42.8%	3			
100%	1			100%	1					
100%	2	50.0%	1			50.0%	1			
100%	10	30.0%	3	30.0%	3	40.0%	4			

表12 野分(散文)

○「何事ぞや」五二② (話主—夕霧中将)

表11によって「や」の係り用法を見る。
 心話文における結びの省略用法が三例目立つだけで、あとはどれも一例か二例散見するくらいである。省略用法の一例を引く。

『源氏物語』係結小考

百分率	合計	会話文		心話文		地の文		こそ		係り用法
		会話文	心話文	会話文	心話文	地の文	心話文	地の文	心話文	
100%	5	60.0%	3	20.0%	1	20.0%	1	動詞	係り用法	
100%	2	50.0%	1			50.0%	1	補助動詞		
100%	2			100%	2			形容詞		
								形容動詞		
100%	13	61.5%	8	23.1%	3	15.4%	2	助動詞		
								名詞		
								副詞		
								省略用法		
								消去用法		
100%	22	54.5%	12	27.3%	6	18.2%	4	断止法	合計	

表13 野分(散文)

表12を見ればわかるように、「か」の係り用法における用言の項は全く空欄であり、助動詞に計七例、心話文に省略用法が一例見られるのみである。その一例を引く。
 ○「あやしのわざや。親子ときこえながら、かくふところはなれず、物ちかゝるべきほどかは」と、目とまりぬ。〔五八七〕(話主―夕霧中将)

表14 野分(結びの助動詞一覽)

百分率	合計	こそ		か		や		なむ		ぞ		自発
		会話文	心話文	地の文	心話文	地の文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	
2.8%	1									1	らる	完了
5.6%	2	2									つ	
2.8%	1							1			ぬ	過去
2.8%	1									1	たり	
5.6%	2	2									き	断定
33.3%	12	3	1	1						2	けり	
2.8%	1									1	なり	推量
5.6%	2					1	1				けむ	
33.3%	12	1	2	2	2	3	1	1			む	合計
5.6%	2		1					1			めり	
100%	36	8	3	2	2	3	2	2	4	1	7	

表13によって「こそ」の係り用法を見る。助動詞の多用ぶりが目立つ他は、会話文における動詞が三例、心話文の形容詞が二例、他は一例ずつ散見されるのみである。
 ○あらはにもこそあれ〔四七七〕(話主―おとど)

表14は、圧倒的に優勢である結びの助動詞の場合を、助動詞の種類別に三つの言語場面も考慮して表にしたものである。

「野分」(散文)における結びの助動詞の総数は、既に表8にも記されたとおり三六例である。「らる」「つ」「ぬ」「たり」「き」「けり」「なり」「けむ」「む」「めり」の一〇種の助動詞が、係り用法の結びとして用いられている。その中でも「けり」と「む」が優勢で、共に三六例中一二例、三三・三%を占めている。それも「けり」は「ぞ」の地の文に、「む」は「か」の地の文に比較的多く出現している。それでは、それらの用例を各助動詞について一例ずつ掲げておく。

らる

○露のかゝれる夕映ぞ、ふと、思ひでらるゝ。地五

九②

つ

○「こゝらの齡に、まだ、かく騒がしき野分にこそ、

あはざりつれ」話四九① (話主—大宮)

ぬ

○いまなむ、なぐさみ侍りぬる」話消息五四⑭ (話

主—夕霧中将)

たり

○唯はひ渡り給ふ程ぞ、ふと見えたる。地六二⑫

き

○「ほとくしくこそ、吹きみだり侍りしか」話六一④ (話主—女房達)

けり

○「紙の色にこそ、とゝのへ侍りけれ」話六二②

(話主—女房達)

なり

○中将の聲づくるにぞあなる。話五一⑬ (話主—お

とど「源氏」)

けむ

○ひが耳にやありけん。地五九⑬

む

○いかなることにかあらむ。話五八⑫ (話主—夕霧

中将)

めり

○衰へにてなむ侍める。話六三⑮ (話主—内の大官)

合	こそ			か			や			なむ			ぞ			計
	会話文	心話文	地の文													
1									1							いふ系
10				1		1	3	1	3				1			あり系
2									2							その他
13				1		1	3	2	5				1			計

表15 野分(省略用法)

次に、係り用法の中のいわゆる「結びなし」の場合について述べる。「結びなし」には結びの省略用法と消去用法とがあるが、先ず、結びの省略用法の表15を掲げる。

(三) 結びの省略用法

結びの省略用法は、省略された語の性質によって三つの場合に大別することができる。第一が引用の格助詞「と」について、「とぞ」「となむ」「とや」「とこそ」などの形で、「言ふ」を省略する場合である。「言ふ」に限らず、「(歌を) 読む・詠む」、あるいはそういうものに助動詞のついた「よみける」なども一括して「いふ系」と呼ぶことにする。この「いふ系」に対して、「あり」を主とするラ変系の動詞(敬体の「侍り」も含む)を省略する場合を「あり系」、それ以外の一般の動詞を省略する場合を「す系」としておく。表では単に「その他」としてある。

表15によれば、あり系は、「こそ」を除く四種の係助詞に出現し、いふ系は「や」の地の文にのみ、す系は「なむ」の会話文にのみ出現している。三つの系のそれぞれの係助詞から一例ずつ引いておく。

いふ系

○きこえ給ふとや。[地六四⑧]

あり系

○「いかにぞ。昨夜、宮は、まろ喜びたまひきや」

[話五二⑦] (話主—おとゞ)

- 「それなん。」 話六四⑦ (話主—内の大匠)
- 「『もし、かゝることもや』と思すなりけり」と思ふに、けはひおそろしうて、 心四七③ (話主—源氏)
- 「あやしのわざや。親子ときこえながら、かくふところはなれず、物ちかゝるべきほどかは」と、目とまりぬ。 心五八⑦ (話主—夕霧中将)
- す系
- 宮の、いとも、心苦しう思いたりしかばなむ。 話六〇⑩ (話主—夕霧中将)

表 16 野分 (消去用法)

合 計	こ そ			か			や			な む			ぞ		接続助詞 体 言 中止法 係助詞 修 辞 計
	会 話 文	心 話 文	地 の 文	会 話 文	心 話 文										
1															1
1															1

「結びなし」のもう一つの用法、結びの消去法は、「野分」では、表16に見られるようにわずか一例が、地の文の「ぞ」で接続助詞で流れている例が見られる。その一例を引く。

○ 内裏の御物忌などに、えさらず籠り給ふべき日よ

合	こそ			か			や			なむ			ぞ			計
	会話文	心話文	地の文													
5			1												4	尊敬語
																謙讓語
3	1						1			1						丁寧語
8	1		1				1			1					4	計

表17 野分(補助動詞 敬語)

りほかは、いそがしきおほやけごと・節會などの、暇いるべく、ことしげきにあはせても、まづ、この院にまゐり、宮よりぞいで給ひければ、まして、今日、かかる空の氣色により、風のさまにあくがれ歩き給ふも、あはれに見ゆ。[地四九⑧]

表17は、結びに敬意を表す補助動詞が来ている例だけを集めて作成したものである。係り結びと待遇表現に相関関係があるかどうか知りたいところであるが、何分にも数がさして多くないので、表16と同様空欄が多いが、他の巻との比較を考慮して項目は減らさなかつた。

表17によれば、全部で八例しかなく、そのうちの四例は「ぞ」の地の文における尊敬語で占められ、あとは一例ずつ散見するのみである。例を引く。

尊敬語

○これよりぞ、わたり給ふ。[地五九⑭]

○檜き口つきこそ、ものし給へ[地六一⑭]

丁寧語

○見苦しきことになんはべる。[話六四⑦] (話主)

内の大臣)

○ことくしからぬ紙や侍る。[話六一⑦] (話主)

霧中将)

○はかなきことにつけても、涙もろにものし給へば、いと、ふびんにこそ侍れ。[話五二⑨] (話主)

中将)

II 断止法

表8によれば断止法は一例で、全用法の二三・四％である。「ぞ」に六例、「や」に三例、「か」に二例あって「なむ」と「こそ」の断止法は見あたらない。それぞれの係助詞から一例ずつ引く。

- きょくもあらずぞ。【地五九】
- 昨夜、宮はまち喜びたまひきや【話五】⑦（話主—おとど）
- 中将の下襲か。【話一八〇】②（話主—おとど）

三

ここから和歌の場合に入る。

表19 野分（和歌）

用例数	ぞ	なむ	や	か	こそ	計
百分率					100%	100%
					1	1

「野分」には四首の和歌が見えるが、係助詞を含む

ものは「こそ」に一首が見られるのみである。その例を引く。

- 吹きみだる風のけしきに女郎花しをれしぬべき心
ちこそすれ【歌五九】⑦

玉臺の詠。

何分にも数が少なく一例のみでは出現順位のつけようもないが、他の巻との比較を考慮して出現順位の表5を次のように掲げておく。

表20 野分（和歌における係助詞出現順位）

係助詞	一位	二位	三位	四位	五位
	こそ				

次に、和歌における係助詞の使用数を散文のそれと対比させた出現率を見ておく。

表21 野分（散文との対比における出現率）

① 散文における係助詞	82
② 和歌における係助詞	1
②の①に対する百分率	1.2%

次に、和歌における係助詞の使用数と総歌数との割

合を見ることにする。その際、参考までに、『伊勢物語』における同様の数値を併記しておく。

表22 野分（総歌数に対する比率）

①総 歌 数	206	伊勢物語	野 分
②和歌における使用数	94		
②の①に対する百分率	45.6%		1
			25.0%

「野分」の和歌における使用数の1という数値は、僅かな数ではあっても、比率として見れば、歌物語と呼ばれる『伊勢物語』の四五・六%という数値に対して、『源氏物語』「野分」の二五・〇%は、さほど低い値ではない。

ここで、他の巻や、他作品との比較を考慮して、いわゆる確定の係助詞「ぞ」「こそ」の場合と、疑問の係助詞「や」「か」（ただし「野分」に出現するのは「こそ」のみであるのだが）の場合に分けて、それぞれ表23・表24を作成しておく。ここでも『伊勢物語』における同様の数値を併記しておく。

表23 野分（和歌における確定の係助詞）

①総 歌 数	206	伊勢物語	野 分
②確定の係助詞使用数	55		
②の①に対する百分率	26.7%		1
			25.0%

表24 野分（和歌における疑問の係助詞）

①総 歌 数	206	伊勢物語	野 分
②疑問の係助詞使用数	39		
②の①に対する百分率	18.9%		0
			0%

表23は、『伊勢物語』と「野分」の和歌に現れた確定の係助詞の数の、総歌数に対する割合を示したものである。『伊勢』の確定の係助詞使用数は五五例であり、総歌数二〇六首に対する割合は二六・七%である。「野分」では総歌数四首に対して、確定の係助詞は一例であるから、割合としては、『伊勢』に近い二五・〇%という数値になる。

表24は、疑問の係助詞の場合である。『伊勢』の疑

問の係助詞使用数は三九例であり、総歌数に対する割合は一八・九%である。一方、「野分」における疑問の係助詞は零であるから、総歌数に対する割合も〇%である。